
幻の一日

なんじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻の一日

【Nコード】

N2288A

【作者名】

なんじ

【あらすじ】

本庁ず物。コナン君は出てきません。悪しからず。お笑い抜き的事件物を目ざしてます。とは言っても、名探偵コナンならではの設定は使用させて頂いています。そう、誰かの体が小さくなってしまうお話です。

1. 焦燥

「高木君！」

悲鳴のような、でもずいぶん遠くに聞こえる声……これは佐藤さんの声？

誰かの腕が、自分の体を支えてくれる。

支えて……？

自分はどうなったんだ？

氷のような冷たい、だが柔らかな手が額に触れる。

「高木君！ ひどい熱じゃない！」

「高木！ おい、しっかりしろ」

声がだんだんはつきりしてくる。

高木は、自分を支えていた、千葉の手を、横によける。

「大丈夫だ。ちょっと、くらっ、と来ただけだから」

「高木、今日はもういい。すぐ帰れ」

「しかし、警部」

高木の抗議を、一顧だにせず目暮は言った。

「千葉、高木を送ってやれ。」

その状態じゃあ、運転は危険だ。

それから、高木。明日、お前は休みだ。」

「目暮警部、それは」

一歩踏み出そうとした高木は、

再び、自分の周りの景色が回るのを感じて、千葉の上着を思わず片手で掴んだ。

その様子を見ていた、目暮は諭すような口調で言った。

「明日の彼らの結婚式までに、何とか借池かりいけを捕まえない、
というお前の気持ちはよく分かる。

だが、無理はいかん」

何とか、反論したかった。

しかし、まっすぐ立つことすら難しい。

「そうですよ。高木君。後の事は、私と佐藤さんにお任せください」

「わかりました。では、白鳥警部。お願いします」

自分でも、今はどうしようもない事が、解った。

『私と、佐藤さんで』という言葉に反応しない高木を見る白鳥の目に、

かすかな、懸念の色が浮かんだ。

運転しながら、千葉が言った。

「高木、病院に寄ろうか？」

大分遅い時間だけど、米花中央病院なら、夜間診療しているし、ここから近い」

「いや、午前中に行って、風邪薬はもらってるんだ。

その時、仕事は休め、って言われたんだけど

薬で、抑えて貰ったんだ。そろそろ、ご利益切れかな」

「借池を、逮捕するためか。

気持ちわかるけど、無理すんなよ」

「でも、無駄だったな。まさか、あんな事になるなんて」

うつむく高木に、軽い口調で千葉が言った。

「せっかく、借池の親父さんに、マウストゥーマウスの人工呼吸まですしたのにな」

「白鳥さんに、怒られちゃったよ。

『不注意な。もし、毒物でも飲まされていたら、君の身も危ないんですよ』って」

「借池より、やつの親父の方が、よほど大物だし
今回逮捕される前に、口を塞いでおきたかった奴は山ほどいたはずさ。

だから、白鳥さんの心配は最もなんだが。

そうは言っても、踏み込んだ部屋で、人が胸を押さえて倒れているのを見たら、

誰だってそうしてたさ。」

「他の課の連中も、この機会に色々聞くことがあったらしいからな。でも、検死の結果は、病死だったんだろ？」

「ああ、詳しい検査中だが、やっぱり、心臓が原因らしいぞ」

借池 朝和。

実業家。

マンション経営、ゲームセンター経営、レストラン経営など、様々な事業を手広く行い、そして成功してきた。

その裏で、何かをやっているといううわさは、高木が警察官になる前から、

ささやかれていたのだが、実際に、その何かが明らかになったことはなかった。

それだけ、借池がやり手だったといえる。

すべてに成功した借池のたった一つの失敗は、自分の息子 朝彦の育て方だった。

借池 朝彦は、父親に匿われているのは確実だった。

その父親は、息子から何の連絡も無いと言い張っていたが、電話の通話記録から、その嘘がばれ、

犯人隠匿で事情を聞こう、とした矢先の突然の死だった。

これで、借池 朝彦を探す有力な手がかりが無くなってしまった。

高木はため息をついた。

それでも、今までの捜査のなかで見落としている手がかりは無いものなのか？

千葉の運転に身を任せながら、数日前、借池の長男 暁と話したことを、

もう一度思い出してみた。

「朝彦を、私が匿っている、とお疑いなのですか？ 刑事さん」

「いえ、その疑うなんて言うことじゃなくって、何か心あたりとかありましたら」

暁は皮肉めいた笑顔で答えた。

「朝彦は、私の所へ寄り付きはしないでしょう。」

親父は、私の母は財産と社会的地位を得るために結婚した女、本当に、愛したのは朝彦の母だけで、全財産は朝彦にやる、と公言してます。

その事は、親父が態度で示しまして、

子供の時から、あいつは欲しいものを何でも、買ってもらえました。私はそれを、ただ見ているだけでした。

だから、あれは、ハナから、私の事を馬鹿にしてるんですよ。

おそらく朝彦は、父の「仕事」仲間にでも匿われているのでしよう」

『仕事』という言葉に、暁は、言うに言われぬ皮肉をこめた。

「もし私に、何か解れば、真っ先にお知らせしますよ。」

私としましても、朝彦に、これ以上恥ずかしい真似はして欲しくないのです」

暁はふと暗い笑みを浮かべた。

「私はずっと親父にひどい目にあわされていたと思っていましたが一番ひどい目に会ったのは朝彦なのかも知れませんね」

怪訝に自分の顔を見る高木に、暁は、言葉が続けた。

「あいつは、子供の頃から、欲しいものは何でも手に入れてきた。

親父の力でね。」

昔はそれが羨ましかった。

でもそれは、本人にとって、とても残酷な事だと、大人になった今、やっと、分かりました。

あいつは、世の中には、決して手に入らないものがあるというのが根本的に、理解できないのですよ。」

そして、暁は、自分の思いを振り払うように言葉が続けた。

「そう言えば、朝彦の手がかりになるのかわかりませんが」

「なんででしょう？」

「先日なくなった板倉 卓さんと、私は、昔、仕事をしたことがあります。」

その関係なのかも知れませんが、昨日父の知人だという人にお会いしました。

ベンチャー企業に色々融資をしている方だそうです。

その方のおっしゃるには、

『板倉さんがなくなったので、依頼して開発してもらっていたソフトが未完成になってしまった。それを完成して欲しい』と。私はお断りしました。

板倉さん仕事をしたことがあるといっても、一度だけですし、同じプログラマーといっても、彼とは、得意とする分野がまるで違いますから。

さて、刑事さん、実は私は、鼻が利くんですよ」

「はあ？」

いきなりの話題の転換に、思わず高木は場にふさわしくない素っ頓狂な声をあげてしまった。

暁が、声を出さず、笑う。

「すみません。いきなり変なことを言って。

親父は、朝彦にはボディガードをつけても、

私には必要ないと考えていたのです。

おかげで、わたしは子供の頃、誘拐されそうになるわ、殺されそうになるわと、

人とは違った経験をたくさんしてまいりました。

親の因果が、まとめて子供に来てしまったわけです」

暁は乾いた笑い声を上げた。

「おかげさまでというべきか、私は、危険な人間に対する嗅覚が鍛えられたようです。

そう、私には、どんなに上品に装っていても、堅気でない人間がわかるんです。

「にいい」としか表現できないんですが、独特の「何か」が体にまつわりついてる、のがわかります。

そして、昨日あった父の知人。

もちろん、外見は、完璧な紳士でしたよ。

けれど、あの人は、非常に危険な「にいい」がしていました。

父の、周りに集まるヤクザな連中の物とは、比べ物にならない、危険な

そして、ひとときわ異質な「にいい」です。

私は、不安に思ったので、部屋を出た後、気づかれぬよう、中の様子を伺いました。

声ははっきりと聞こえませんでした。

”板倉と専門が違う。話にならん。”

”息子がどうなってもいいのか”

知人を名乗る男がそう言っていました。

後は、親父の声です。

”金ならいくらでも出す”

後は、小声で聞き取れなかったのと、私のカンが、

深入りすると危険だと告げていたので、

私は、部屋から離れたのですが・・・。

もしかしたら、朝彦は、その男の下に匿われているのかも知れませんが、

高木は、暁から、その「危険な男」 魚塚 三郎 からの名刺をも

らい受け、調べた。

しかし、誰もが思ったとおり、男の名前も、会社の住所も自宅のそれも、

でたらめだった。

念のため、板倉 卓の仕事関係の人間にもあたってみたが何も手がかりはなかった。

借池 朝彦は必ず、古谷 夕子と、青野 陽一の結婚を阻止しよう

とする。

二人に、何の心配もなく、結婚式を挙げさせるためにも、なんとしても、式前に借池の行方を突き止めたかった高木だった。

「高木、あまり心配しなくても、借池も、もう年貢の納め時だろう」
千葉が考え込む高木を横目で見ながら言った。

「確かに、「結婚式は絶対挙げさせない」という脅迫電話を、逃亡先から、わざわざ、かけてきたけどな。

頼りになる親父がいなきゃ、もう、誰も、奴の言う事なんか聞きやしないさ。

あんな奴、一人じゃ、結婚式を邪魔するどこか、なんにも、できやしない。

捕まるのも時間の問題だ。

それに、明日の式は、新郎には、山ほど警護はつくし
新婦の方にも、念のため、佐藤さんが警護で付くんだぜ。

絶対に、二人は大丈夫さ」

「そうだな。佐藤さんがいるなら、奴が100人きても、OKだよな」

冗談を言う声にも元氣のない高木に千葉は言った。

「それより高木。今晚、俺んちに泊まらないか？」

千葉が自分の体のことを案じてくれているのがよく分かった。

「ヤダね、お前いびきがひどいから。

ゆっくり眠れない」

何とか作った笑顔で答える高木を、心配そうに千葉は見た。

「明日は、間違っても、出勤しようなんて思うなよ。高木。

お前が、嫌味に、いつもどおりの反応をしないから

白鳥さんも、心配してだぜ。」

2. 死の予感

部屋に戻ると、新聞と雑誌の束が目に入った。

” そうだ。明日は、小学校の廃品回収。

最近、出してくれる人が少ないから、ご協力を、って、少年探偵団に頼まれたんだっけ”

明日は、休めと言われたが、高木はその気はなかった。

” 一晩眠れば、こんな風邪くらいすぐに良くなる”

高木はそう思った。

といっても、明日の朝は、少しでも長く眠っておきたい。

朝、持っていないとなると、今しか持っていない時間はないのだが、指定の場所まで、新聞と雑誌の束を、運ぶ気力は、無い。

” でも、出すって言っちゃまったし、警察官が嘘つくのもなあ”

高木は、しかたなく新聞紙と雑誌を持ち上げた。

やけに重く感じる。

収拾場所に指定されている、駐車場の隅に、たどり着いた時は、体中に汗が吹き出していた。

高木は汗をぬぐいながら思った。

” あ、熱い。熱があがっているのか？

いや、何か変だぞ？

これ、本当に風邪なのか？”

突然、心臓が大きく動悸を打った。

高木は胸を押さえた。

足から力が抜け、アスファルトの上に、膝まづく。

そのまま突っ伏しそうになるのを、かろうじて片手で支える。動悸はおさまらない。

ますます、激しくなる。

体が異様に熱い。

骨まで溶けているような気さえる。

”これは、普通じゃない、一体、これは・・・”

目の前の景色がかすんでいく。

まさか、という思いが、脳裏に浮かぶ。

”死ぬのか？俺は”

こんな所で、こんな風に？”

刑事と言う職業である以上、職務中の死を、思った事はあった。

しかし、駐車場の片隅で、行き倒れなんて。

視界も意識も、闇に包まれ始めた。

”やっぱ、死ぬのか・・・俺”

胸を押さえていた手が携帯電話を探る。

”声を・・・聞きたい。最後に、一言でも・・・”

かろうじて、ボタンを押し、耳元に当てようとした手から、携帯電話話が滑り落ちる。

”さ・・・と・・・”

高木の体はその上に倒れこんだ。

3. 信じられない現実

電話の音。自分の携帯の音だ。

高木は目を開く。

なぜかアスファルトの上にうつ伏せになっている。

体の下に、携帯電話がある。

取ろうとすると、背広の袖が邪魔する。

手が、袖から出ない。

”変だな？”

背広の袖ごと携帯を取った高木は自分の体の異変に気がついて、背筋が凍る。

”体が、縮んでる？”

体が、背広の中に埋まっている。

電話は執拗になり続ける。

表示は、佐藤からだ。

自分の現実を無視して、まずは佐藤からの電話に出る事を高木は優先した。

「高木君。大丈夫？ごめんなさい。

一回、コールがあったきりで、切れちゃったから、ワン切りかと思っ
って、

電番確認しなかったのよ。

今、既歴見たら、高木君からで。

もう遅いからどうしようかと思ったんだけど

調子が悪いんじゃないかと思って。

どうなの？風邪の具合」

体の大きさはとにかくとして、自分でも、驚くくらい、体の調子は
よかった。

さっき、死ぬかもしれないと思った自分が恥ずかしく思える。
声を出そうとした途端、高木は激しく咳き込んだ。

佐藤が、電話の向こうで心配している。

高木は必死で声を出した。

「だいじょ・・・」

再び咳。

我ながら、ひどい声だ。

元太が風邪をひいても、こんなひどい声にはならないだろう。

「喉にきてるのね。」

無理して喋らないで。

じゃあ、質問するから、イエスなら、1回。ノーなら2回携帯を叩いてね」

高木は、必死で、自分の手を袖から出した。

熱は？

2回。

体の調子はいい？

1回。

ご飯は食べられる？

1回。

細々とした質問が続いた後、佐藤は控えめに言った。

「今から、迎えに行くから、うちに来て泊まらない？ 一人じゃ、大変でしょう？」

2回。

「そうね、明日はお母さんだけしかいないし、かえって気を使っちゃうか」

高木は、微笑んで、ゆっくりと5回携帯を、叩いた。

佐藤は、少し考えている風だった。

「分かった。『ありがとう』ね。」

寝ている所を、起こしてしまつてごめんなさい。

私、しっかり捜査するから、仕事を気にして、メールなんかしちゃダメよ。

絶対に、ゆっくり休むのよ。

これは先輩からの命令ですからね」
1回。

「じゃあ、おやすみなさい」

切れた携帯をしばらく見つめた後、高木はもう一度自分の体を見下ろした。

最初にこの状態に気がついた時は、半ば夢ではないかと思っていた。佐藤と話しているうちに目が覚めるのではないか、そう思っていた。しかし、この身に何の変わりもない。

”風邪のせいなのか？”

とにかく、寮に戻らなくちゃ”

しかし、背広が絡まって歩けない。

靴もあまりにも大きすぎる。

ふと、廃品回収に出された、衣服が目についた。

紙袋の中に入っている服を出してみる。

どうやら、小学校の入学式の時にでも使ったらしいスーツが、一式、入っていた。

ありがたい事に、靴も靴下も入っている。

早速着てみると、サイズはやや大きめながら、問題なく着る事ができる。

”靴は廃品回収に出しちゃ、いけなかったんでは”

自分の体のことは、あまり考えたくない高木であった。

空いた紙袋の中に、無理やり自分の服と靴を詰め込んで、こっそりと寮に戻る。

奇跡的に誰にも見つからずに済んだ。

部屋に戻った、高木は、タンスの内側の、全身が映る鏡を見つめた。

薄い灰色の半ズボンとスーツ、青みがかった灰色のワイシャツ、そして、赤い蝶ネクタイ。

”なんだか、色違いのコナン君みたいだ”

思わず、コナンの様に、考え込むポーズをとって決めている。

そして苦笑。

”こんなことしている場合じゃないんだよな”

とはいえ、どうすればよいのかと、考えれば何も思いつかない。病院へ行った所で自分の今の状況

・・・突然小さくなった・・・なんて信じてもらえるだろうか？

高木は、疲れと眠けが襲ってくるのを感じた。

ここ数日仕事であまり休めていない。

”今考えても何も思い浮かばない。

とりあえず眠ろう

それに、一晚寝れば

元に戻るかもしれないし”

何の根拠も無い期待を抱いて、高木はベッドに倒れこんだ。

4. 終わらない現実

高木は、チャイムの音と、ドアを激しく叩く音で目を覚ました。半分眠っている頭で、ドアに行こうとして、ベッドから、落ちかける。

”あれ？ベッド、こんなに高かったっけ？”

急に頭がはつきりして、昨日からの出来事を思い出す。体は昨日のままである。

執拗に、チャイムと、ノックの音は続くが、出るわけには行かない。ドアの外から声がある。

「高木君！寝てるの？！留守なの？」

由美の声だった。

携帯が鳴る。

由美からだ。

出ようとして、踏みとどまる。

昨日は、何も考えずに佐藤の電話に出てしまったが、今の自分の体では、大人の声など出るはずは無い。

試しに声を出そうとした。

が、結果は、かすかな嗄れ声と咳きこみだった。

高木は、布団にもぐりこんで、咳の音を消そうとする。それでも、音が、ドアの外まで漏れたらしかった。

由美が、ドア越しに大声を出す。

「高木君？いるの？調子悪くて動けないの？」

悪いけど、管理人さんをお願いして、踏み込むわよ。美和子が心配して様子見て来てって、

頼まれたから、ほおって置くわけに行かないの。

裸で寝てるんなら、布団だけはかぶつといてよ！」

ドアの向こうが、静かになった。

高木は慌てた。

裸で寝てはいないが、この状況を見られたく無かった。

玄関から靴を持ってきて、財布をポケットに無理やりねじ込み、雨どいを伝って、脱出する。

” 大人だったら、このやわな雨どいは壊れるよな ”

自分の体の軽さを実感しながら、高木は地面に滑り降りた。

由美に見つかからないように、寮から急いで離れる。

しばらく走って一息ついてふと思う。

” 自分の寮の部屋にいるならとにかく、

道端で本庁の皆に、出合ったとしても、自分が『高木』だと分からないだろうな ”

気がつけば、太陽はずいぶん高く上っている。

疲れのせいで、昼近くまで眠ってしまったらしい。

しかし、まだ間に合う。

高木は、一つの決意を胸に秘めバス停に向かった。

5. 決意とともに

『米花中央公園前、米花中央公園前、お降りの方はー』
バスに乗るのは久しぶりのような気がする。

” えっと、米花会館前で降りればよかったんだよな ”

高木は、記憶を確認する。

結婚式は、2時からだった。

今からいけば間に合う。

” しかし、行って何ができるんだ、俺 ”

高木は自分の掌をいまだ、信じられない思いで見つめた。

柔らかな、子供の手。

千葉は、奴は何も出来ないといった。

だが、高木にはどうしてもそうは思えなかった。

奴は必ず、結婚式にやってくる。

そして必ず、また、青野陽一を、殺そうとする。

古谷夕子を手に入れるために。

高木は、陽一の経営するサンデーマートの、常連だった。

寮の近くのコンビニに、高木のひいきのプロレス雑誌が置いていなかったの、
だったので、

やや離れたそこに足を運んでいた。

古谷夕子はその店員だった。

ある時、仕事で、発売日にプロレス雑誌を買えなかった高木が、な
くて元々、と

サンデーマートを訪れた。

物欲しげに、今週号のなくなった雑誌コーナーを眺めていると、青
野が、声をかけた。

「高木さん、雑誌、とってありますよ」

高木が、礼を言う間も無く、突然の大声が店中に響いた。

「おらあ、まだこんな店やっとなるんかい！！！」

「とっとと、出ていかんかい！！！」

高木以外の客は、皆、店からそそくさと出て言った。

体格の良い二人組みの背後から、背の低い、痩せた男が、白い背広に赤いシャツという、着る本人にまるで似合っていない、しかし、明らかに、高級な仕立てのいでたちで現れた。

「さあ、夕子さん、私と一緒に参りましょう」

「借池さん、私ははっきりお断りしたはずです」

陽一は夕子を背後に隠し、男の手を払いのけた。

大学でラグビーをやっていたという、陽一に、優男の借池は軽々と飛ばされた。

優男は、男二人に言った。

「やっておしまい！」

近づく二人と、陽一の間を高木は割って入った。

「よせ！」

「高木さん！やめて下さい！怪我をします！」

こいつら本気ですよ」

高木を押しつけて前に出ようとする陽一を抑えて、高木は警察手帳を出した。

男二人は、背後の男の様子を窺う。

「やれ！どうせこんな男たいした事ないわ」

その悲鳴のような声に二人の男は急かされるように同時に高木に飛び掛った。

たいした事がなかったのは、男二人の方だった。

借池は、高木が二人をあつという間に取り押さえたのを見て悔しそうに陽一の顔を見た。

その目は、人間の暖かさとは無縁の生き物のように見える

高木は不吉なものを感じた。

そして、借池は、高木が男達に手を取られているのをよい事に、すばやく姿を消した。

夕子の電話で現れた、交番の巡査に二人組みを任せた高木に陽一は聞いた。

「あ、あの高木さん。ホントにお巡りさんなんですか」

「はあ、まあ」

交番の巡査が笑いながら言った。

「店長さん、高木さんは、泣く子も黙る本庁一課の刑事さんですよ」

「ええ?! でも高木さん、サンデーマーケットカードの職業欄は、”公務員” って。」

あ、ああそうか、刑事さんでも公務員なんだから……。

でも、私は、てっきり、あの、事務職の方かと……」

高木は苦笑せざるを得なかった。

その後、高木は、詳しい事情を、若い恋人達から聞くこととなった。

古谷夕子の親は、7歳の時に彼女を残して、自殺してしまった。

両親は、事業に失敗し、借金を作った。

その取立てのあまりに厳しさに耐えかねての

死の選択だった。

親戚に引き取り手のなかった彼女は、施設で育った。

真面目に勉強し、ある会社に就職した。

それが、借池 朝和の経営する会社だったのだ。

表向きは、しごく硬い会社に見えたので、彼女は就職できた事を喜んだ。

明るく、仕事のできる彼女は、人気者になった。

その彼女に目をつけたのが、朝彦だった。

”私も、決して家族に恵まれていたわけではないので最初は、私、あの人に同情してしまっただけです。

自分が妾の子だから、色々邪険にされた、って言う

あの人の言葉を信じ込んで。でも・・・。”

非常識なまでの嫉妬心と、そして暴力。

夕子には、決して手を上げることは無かったが、

夕子が、声をかけたと言うだけで、他の男を袋叩きにした。

そんな朝彦から、夕子の心が離れるのに、時間は、かからなかった。

しかし、朝彦は、夕子に執着し、とうとう、夕子は会社を辞めて、姿を消すことにした。

そして、生活のためにコンビニで働き出し、そこで陽一と出会うことになった。

二人の想いは、いつしか重なり合い、夕子は、幸せに、なれると信じた。

だが、借池は、夕子をあきらめてはいなかったのである。

夕子が陽一のコンビニに勤めている事を突き止めると、

そこに有形無形の嫌がらせを仕掛けてきた。

交番の巡査にも相談はしたが、あちらの方が上手で、なかなかしっぽを

掴ませない。

交番の巡査が晴れ晴れと言った。

「いや、高木さんが居合わせてくださって、助かりましたよ。

あいつら、いつも民事不介入を盾にして、逃げちまうから、

私も悔しい思いをしてたんですよ」

夕子が、警官とは対照的な表情で言った。

「私、心配です。

今までは、あの人は、これは、警察沙汰にはならないやり方なのさ、って

自分のやり口を自慢してたんです。

でも、今日は高木さんが、刑事さんがいたのに。

その前で襲ってくるなんて。

何か、籠が外れたんでしょか。

私、あの人がとんでもない事をしでかしそうで怖いです」

「大丈夫ですよ。

きっと僕が、頼りなさそうに見えるから、油断したんですよ」

高木は、理由のわからぬ一抹の不安を感じながらも、

夕子を安心させるためにそう言った。

その言葉に、少しばかり安堵した容姿を見せた夕子だった。

しかし、彼女の心配は杞憂ではなかったのである。

『次は、米花会館前』

車内アナウンスに高木は我に帰った。

料金箱に200円放り込んで高木は急いでバスから降りようとした。

「坊や、子供は100円でいいんだよ」

運転手は、笑顔で、ポケットを探って、100円玉を高木に手渡した。

高木は頭だけ下げて、お金を受け取り、バスから降りた。

100円玉が食い込むほど、手を握り締めているのに

その痛みで初めて気付き、手を開く。

”俺は、本当に今、子供なんだ”

小さな手の平の上の100円玉を見つめて、高木は思った。

”守れるのか？俺に。でも、行かなくては”

高木は、100円玉をポケットにねじ込むと、米花会館へと歩き出した。

6. 花束

米花会館への道は、留袖姿や、ドレス姿の人が目に付く。
今日は大安吉日。

結婚式場は大忙しの日だ。

人の出入り入りが多いので、それだけ警備は難しくなる、と高木は思った。

”だが、その分、俺も、客にまぎれて、式場に入りやすい。
そして借池も”

高木は、米花会館へ向かう人たちを、用心深く見つめながら歩いた。

高木は、会館前の花屋にふと目を留めた。

” そうだ、せめてあの二人に花束を贈ろう ”

高木は、花屋に入り、どんな花を贈ろうかと考える。
しかし、まったく見当がつかない。

高木は、店員を呼び止めようとして咳き込んだ。

そばかすが顔中に広がった店員は笑顔をそれ以上に広げて
高木の前に、しゃがみこんだ。

「坊や、どうしたの？」

『坊や』という言葉に今だ慣れない。

高木は、咳き込み、そして、物を書く真似をした。

店員はすぐに高木の意味する所を汲み取り
メモ帳と鉛筆を持ってきた。

『結婚式のお祝いの花。幸せになれる花を』

「お、坊や。難しい注文してくれるね。

でも、おねえさん、こんな注文大好きだよ。

さて、坊や。どのくらいの値段がいい？

あっと、坊やが持っていくならあまり大きなもんじゃ、ダメかな？」

高木は、値段、配達先を紙に書いていった。
店員はメモを上げ上げ見て言った。

「よし、分かった。」

お姉さんが飛びつきりの花束作ってあげるよ。

しかし、坊や、難しい字もよく知ってるし、

大人みたいな字を書くねえ。

お姉さんは、よく子供っぽい字、って言われるから、
羨ましいよ」

高木は、笑顔が引きつるのを感じた。

つい、自分が今子供である事を忘れてしまう。

店員は、時々、迷いながらも、次々と花を選んでいく。

細く、長い指に選びだされた花は、誇らしげに見える。

高木が、自分の手元を見つめているのに気づいた店員は
少し恥ずかしそうに言う。

「手が、荒れてるでしょ」

高木は黙って、笑顔のまま首を横に振る。

確かに、手は、あかぎれが、出来ていて滑らかとはとても言えなかった。

でも、花に添えられた指は長く美しかった。

”佐藤さんには、どんな花が似合うだろう”

高木は、いつの間にかそんなことを考えていた。

ふと、ピンクのスイトピーが目に残る。

ふわふわとした花びらが、幸せそうで、佐藤によく似合う気がした。
そんな高木の様子に気付いた店員が笑顔で花束にスイトピーを加えた。

「坊や、これでどう？」

愛らしい花束が目の前にあった。

高木は、満足して頷いた。

「米花会館に配達ね。

よっちゃん、もうじき、会館に行くよね」

店の奥から、もっさりとした雰囲気の方が店員と同じエプロンをつけて出てくる。

「おう、配達追加か？」

花束を手渡す時、店員の細い指と、男の、関節の太い指が触れ合う。二人は、微笑を交わす。

その雰囲気から、夫婦でこの店を切り盛りしている事が知れる。

高木は、暖かい気持ちになる。

”あの二人にも、こんな幸せな生活をしてもらいたい”

高木は、店を出た。

深呼吸をして、緊張をほぐす。

さあ、米花会館だ。

7. ロビー

米花会館は、人でいっぱいだった。

式の終わった人々が、三々五々集まっておしゃべりをしている。

新郎新婦の友人達が騒いでいる。

その中を、これから式に出席するらしい招待客が、自分の行くべき会場を

探してうろうろしている。

その間を縫って、子供が駆け回る。

迷子らしい子が泣いている。

警備する側から見れば、頭の痛くなる光景だった。

高木の見回した所、明らかに怪しい、と思える人物は、一人だけだった。

そう思った自分を恥じながらも、高木は、笑いを噛み殺した。

”高野さん……。怖すぎです”

式服は、高野の迫力を、いつもにまして、引き立てていた。

追いかけてっこをしていた子供が高野にぶつかる。

転んだその子を、高野は助け起こそうとした。

しかし、高野の顔を見た途端、子供は泣き出した。

母親らしい女性が慌てて高野から、子供を引き離して、走り去る。

高野はため息をついた。

傷ついた表情だ。

”すみません、高野さん。

今日は非番なのに、俺の代わりに出て下さったんですね”

式場に向かう人間が、必ず通らなければならない場所に高野は、陣取っている。

高木は、自分の事がわかるはずなど無い、とは思っていた。

しかし、高野の前は避けて通りたかった。

高木は、なるべく高野から遠い場所を歩こうとした。

が、式が終わったらしい、人達がやって来て、

その人ごみに押され、高木は、結果的に高野のすぐ前に出てきてしまった。

その時、高野がつぶやいた。

低い声だったが、高木の耳には、その声は雷のように響いた。

「つくしょう……。高木の奴」

”まさか、ばれた!!”

恐怖を顔に張り付かせ、思わず見上げた高木の視線は、高野のそれと、真っ向からぶつかってしまった。

と、高野は、高木以上にうろたえた。

「ぼ、坊主、泣くな、泣いてくれるな。

おめえに言っただんじゃねえんだ。

泣くなよ、ほれ、綺麗な花嫁さんだ」

いきなり顔を後ろ向きにされる。

”高野さん、首折れます”

心の中で叫びながらも、高木は、高野の指差す方をみて、首の痛みを忘れた。

本当に綺麗な花嫁だった。

ピンク色のドレスである。

”あれ、キャミソール、っていうのかなあ。

スカートが着いてたら、キャミソールじゃないのか。

長いドレスもいいけど、短いドレスも、いいもんだ。

綺麗な、足だ。

そう、佐藤さんも……”

いつしか、その花嫁の顔は、高木の頭の中で、佐藤の顔に置き換わっていた。

「坊や、大変！鼻血が出てるよ！」

妄想の世界から、いきなり現実の高木は引き戻された。

中年の女性が、袂からティッシュをだして鼻を抑えてくれる。

「おう、坊主、大丈夫か？」

高野も心配そうに、しゃがみこむ。

「高野さん、どうかされたんですか」

その声に、高木は思わず肩をすくめ、ティッシュの中に、鼻だけでなく

顔までうずめようと、試みていた。

「いや、この坊主がね、いきなり鼻血を出しちまって。

人が多いから、のぼせたみたいだな」

頭の上から高野の声が聞こえる。

高木は、顔をなるべく隠しながら、目だけで、新たな声の主の様子を窺った。

式服に身を包んだ白鳥であった。

白鳥は、目の前の高木よりも、人ごみの方に視線を、向けている。

「白鳥、どうかしたのか」

気もそぞろな、白鳥の様子を、高野も不審に思ったらしかった。

「高野さん、高木君が来ませんでしたか？」

”来てます”

思わず、心の中で、返事をしてしまう高木であった。

「高木く？奴は、風邪で寝込んでるんだろ？」

「寮から、逃亡した、と、由美さんから連絡がありました」

”逃亡って、由美さん”

「あのバカ、人を出勤させといて、こっちに来るつもりかよ。」

「借池の潜伏先を調べている、千葉君の方には行ってないようですからね。

こちらに来るつもりに決まっていますよ。

まったく、高木君ときたら・・・。」

白鳥と一緒に、高野もため息をついた。

「ま、あのバカ、ガイシャの嫁さんに言われたのが、大分こたえてた見てえだからな」

「私も、その話は聞きました。」

しかし、警察官なら、この先何度だって、そんな事は言われるでしょう。

その度、倒れるまで仕事していたら、かえって、捜査に支障が生じますよ」

「まあ、白鳥。奴は、お前より若いからな。」

じゃあ、高木が来たら、追い返せばいいんだな」

「そうして下さい。」

それと、佐藤さんには、高木君は大人しく寮で寝ている、という風に由美さんに伝えてもらいましたから、そのつもりで」

「了解だ」

高野は、人ごみに油断なく目を配りながら、言葉を続けた。

「それにしても、借池の奴、あきらめ悪いぜ」

「彼にとっては、青野さんは、夕子さんにふさわしくない

”貧乏人”なんだそうですからね。」

あきらめるとか、というような、常識的な行動は出てこないでしょう」

「しかし、やってきたとしても、元ラグビー部の猛者がうようよいるんじゃない、

ガイシャに近づくどころじゃなさそうだな。」

ところで、美和ちゃんのほうは、どうだ？」

「特に問題無しです。」

あんな男でも、今まで夕子さんを傷つけた事は無かったのですしおそらく、来るとしたらやはり新郎側でしょう」

白鳥の声を頭の上に聞きながら、高木は、ティッシュを外してみた。出血は止まっているようだった。

何気なく、二人の刑事から、離れようとした高木は白鳥に呼び止められて、

身を硬くする。

「坊や、医務室の方へ連れて行ってあげようか」

白鳥が、高木の前にしゃがみこむ。

反射的に駆け出したくなる体を、意志の力で必死に抑える。
思い切り無邪気な笑顔を作って首を横に振る。

”俺、バカみたいだ。

こんなに表情作らなくなったって、ばれるわけないのに”

理性はそう分かっていても、感情はそうはいかない。

ましてや、どういうわけか、白鳥がまじまじと自分を見つめている
以上

顔の筋肉が痙攣を起こしそうな気がしても、この笑顔を崩すわけには行かない。

ふと、白鳥の表情が翳り、ひとり言のように言った。

「君も、その笑顔で人がやっとな手に入れようとしたものを、
あっさりと自分の物にしてしまうんだろうな」

高木は、笑顔を作るのを忘れて、白鳥の顔を見つめた。

白鳥は、苦笑いを浮かべて立ち上がった。

「気にしないでいいんだ、坊や」

高木は何の事か分からぬまま、白鳥から離れた。

8. 廊下

さて、自分はどこに行くべきだろう。

高木はあても無く廊下を歩きながら考えた。

もし自分が、まともな体だったら、青野 陽一の所へ行くだろう。

しかし、白鳥を始め同僚刑事が山ほにいる中、

今のこの自分ができることがあるだろうか。

と、その時、

「返せよ、兄ちゃんのバカあ！」

「なぐにいつてんだよ、俺のソフトを代わりにやるっていったじゃんか」

「それ僕のだ!!」

僕だけのにしていって、お母さんが言ったもん!!」

「これやめなさい」

高木の目の前で、小学生らしい兄弟の取っ組み合いが始まった。

二人を止めようとしたのは、小林刑事だった。

”この近くに花嫁の控え室があるんだ”

そう思った高木の上に、巨大な物体が倒れてくる。

思わず高木が、それを避けたおかげで、

小林刑事は廊下にしりもちをついた上

壁に頭をぶつける羽目になった。

どちらかに突き飛ばされたらしい。

小林刑事は頭を押さえて立ち上がれない。

兄弟たちはどちらもかなり頭に血が上っているらしく

攻撃がどんどんエスカレートしていく。

兄の方が、弟を手を持っていたゲーム機で殴ろうとしたのを見た時

高木は思わず弟の方を自分の体でかばっていた。

口の中に血の味が広がる。

思わず反撃しようと体が動く。

”待て、いくら、今、子供だからって言って、逮捕術を知っている俺がその気になったらまずいのでは？”

手が止まる。

その隙にもう一度殴られる。
兄が高木に気を取られている間に、弟がゲームソフトを取り返した。
と、兄が再び取り上げようとし、
そして、いきなり、弟の方がソフトを床に叩きつけ踏み潰した。
大声で泣いている。

その声を聞きつけたのか、部屋から、女性が顔を覗かせた。

「何してるの！」

「お母さん、兄ちゃんが、僕のソフトを取ろうとしたんだ」

「言っとくけど、壊したのはこいつだぞ」

「だって、兄ちゃんいつだって、僕の取るもん。」

これは僕の、僕だけのソフトだ！

絶対兄ちゃんにやらないんだから！」

「もう、壊しちゃったら使えないでしょう」

呆れたように、母親は言い、高木にふと目を向けた。

「坊や、唇どうしたの？」

高木は唇を指でこすり見てみる。

指に血がうつすらとついている。

「兄ちゃんが殴った」

弟が言うと同時に、母親のゲンコツが、兄の頭上に炸裂した。

兄と弟の泣き声の二重唱が廊下に響いた。

「一体、どうしたの？小林君？」

母親が顔を出したドアから出て来たのは、目暮警部夫人 みどりだった。

高木は、一瞬驚いたが、すぐに、ここは夕子の控え室だと気がついた。

夕子の親代わりと、護衛を兼ねて、
目暮夫妻が、結婚式に出席する事になっていたからだ。

小林より先に、母親の方が言った。

「すみません、目暮さん。うちの子が騒いじゃって」

「あら、坊や、怪我してるじゃない」

みどりが高木に言った。

「お薬つけましょ」

あつという間も無く高木は、みどりに部屋に連れ込まれてしまった。

9. 控え室

部屋には、ウエディングドレス姿の夕子が鏡の前に腰をかけていた。その横には、米花会館の女性職員の制服である、薄い柿色の和服姿の佐藤がいた。

「どうしました、奥様」

いつもと変わらぬ佐藤の声。

昨日、と言うか今日の夜中に聞いたばかりなのに、すいぶん長いこと聞いていなかったような気がする。

みどりの代わりに、兄弟の母親が答えた。

「ごめんなさい、刑事さん」

「あら、今は刑事さんじゃないのよ、付き添いの佐藤さんでしょ」

「あ、すみません。」

うちの子達を待たせといたら、退屈してケンカしちゃって。

よその子まで怪我させてしまったんです」

「ごめんね。星美、坊や達。私が無理言ったから・・・」

夕子がすまなそうに言った。

「あゝら、気にしない、気にしない。」

花嫁のブーケを作れるなんて、光栄の至りだもの。

さて、ゴメンね、坊や、お菓・・・」

ところが、また兄弟たちがケンカを始めた。

「星美さん、この子の手当ては私がするから、

おちびさん達を外へ連れて行ってやって。

退屈してるのよ。きっと」

みどりが言った。

母親は、高木に謝りながら、兄弟二人の首根っこを掴んで部屋から出て行った。

「さ、まず口の周りを綺麗にして」

みどりがハンカチで高木の血を拭き取る。

そして、まじまじと高木の顔を見て言った。

「いやあ、君って私の知っている刑事さんにそっくりね」

高木はあっという間に、みどりに抱きすくめられ頭をくしゃくしゃとんでられてしまった。

「高木君を見るたんびに、一度こうしてみたいって思ってたのよ。可愛いなって。ね、佐藤さんもそうは思わない？」

佐藤は心持ち顔が赤らんでいるようだった。

「いえ、別にそんな」

「高木君って、若い頃のあの人に、感じが似てるのよね」

「あの人って、目暮警部ですか？」

佐藤の声に、微妙な抗議の色を感じ取ったのか、みどりは笑いながら言った。

「姿形はまるで似てないのよ。」

でも、仕事に対する姿勢がとても似てるの。

目暮は話した事があったかしら？ 私たちのなれ初め」

佐藤は首を横に振った。

「私は、高校の時はちよっと、突っ張っててね、

そういう、ツッパリばっか狙ったひき逃げが何件もあって、

私の友達、ひき殺されたの・・・。

犯人はなかなか捕まらなくて。

私は、警察が、町のダニが減っていいから

犯人を野放しにしてるんだって思ったのよね」

「そんな事は！」

抗議の声をあげる佐藤をみどりは優しく見た。

「私が、捜査に来たあの人にそう言ったら、佐藤さんと同じように、言い返されたわよ。」

でも、私は警察を信じていなかった。

だから、私は自分がおとりになって犯人をおびき寄せようとしたの」「そんな危険な事・・・。警察はやめさせたんじゃないあ？」

佐藤がもつともな疑問を述べた。

「もちろん、止められたんだけどね。

私無視して、歩き回ってたら、護衛だって、目暮を漬けられちゃった。

これがまたうっとおしくってね、私が追い払っても追い払っても、ついてきて

で、結局、二人して犯人の車に轢かれちゃったのよ。

馴れ初めとしちゃあ、間抜けよね」

みどりはからからと、明るい声で笑った。

佐藤は、どういう表情をすべきか、困ったような顔をした。

高木は、初めて聞く話に、以前の婦女連続殴打事件とそれに絡んだ、デパート地下駐車場の殺人事件の時、

なぜ目暮があればほど強い反応を見せたのか納得した。

夕子が、ぽつりと言った。

「そういう方の元で働いているんですもの。

真面目に捜査してない、なんてこと、絶対無いですよね、高木刑事さん。

なのに私、ひどい事を言ってしまったて・・・」

その時の記憶が胸の痛みとともに蘇る。

一課の机の電話が鳴る。

「コンビニの店長が刺された！高木！サンデーマートの・・・」

千葉の声。

駆けつけた病院の廊下。

友人に付き添われた、蒼ざめた顔の夕子。

声をかけようと近づいた高木に気付いた夕子が叫ぶ。

「あなた！真面目に捜査してなかったでしょう！！

どうせただの嫌がらせだと思って！

警察なんて、誰かが死ぬまでいつも何にもしてくれないのよ！」

陽一を刺した犯人はすぐに捕まった。

その話から、借池家の事情がわかってきた。

借池興産の経営は、かなり危ない状態になってきている事。

借池 朝和は、一見元気そうだが、心臓を患っていて、いつ何時命を無くしてもおかしくない状態であること。

朝和はもちろん、朝彦を後継者に指名していたのだが、借池興産に融資している銀行が、それに難色を示したのである。

そのため、借池興産の次期社長を巡って様々な思惑が入り乱れている事。

「俺たち、あいつのことを陰で良くこういつてたんですよ。裸の王様だって。」

親父がやばいって分かって、やっと、自分が裸だって事に気付いたんでしょうね」

陽一を刺した男は、取調室で言った。

「今なら、金で、言う事を聞く、俺みたいな奴を使って、好き勝手できるけど、

親父が死ねば、会社から追い出されて、何も出来なくなるって。

もっとも、あいつが社長になったら、借池興産はあつという間に倒産だ。」

男は乾いた声で笑った。

幸いなことに、陽一は、一命を取り留めた。

借池に出会った、あの時から、いいかげんな捜査をしているつもりはなかった。

しかし、自分がもっと、夕子の「あの人は、箍がはずれたんだろうか」といった言葉を

もう少し深く考えていたら、この犯行は防げていたはずだ。
その思いは、夕子に病院で投げつけられた言葉とともに、
高木の心を深く傷つけたのであった。

「私の両親、自殺しましたでしょう」
夕子が、みどりと佐藤に話しかけた。

「両親はサラ金に手を出して、そしてその金融会社の人間に脅迫されて、

怯えきった挙句自殺したんです。

両親は、最初あまりの取立てのひどさに警察に相談したんですが、
民事不介入だからって何もしてくれなくて。

だから私、高木さんも、たかだか、脅迫だ、と何もしてくれなかった
思ってたんです。

でも、体を壊すまで捜査して下さっていたんですね。

今日は、本当に、謝りたかった」

うつむく夕子の肩を佐藤は優しく叩いた。

「高木君なら、夕子さんの気持ちはわかってるわよ」

高木も、内心頷いた。

夕子が、潤んだ瞳で、佐藤に笑顔を見せた。

みどりが高木に言った。

「坊や、薬をつけましょ」

みどりが立ち上がり薬を取りに別室へ入った。

その代わりに佐藤が高木の前にしゃがみこむ。

ふんわりと良いかおりが高木を包む。

「坊や、お名前は？」

”ゲッ、答えようの無い質問を・・・。”

高木は、答えようとする振りをしてから

大げさに咳き込んだ。

佐藤はその背中を優しくなでてくれる。

「坊やも風邪引いてるのね。

無理しなくていいわよ」

咳の収まった、高木の顔に必要以上に、

佐藤の顔が近づく。

”さ、佐藤さん、いったい・・・”

佐藤は、高木の額に自分の額をくっつけた。

高木は、顔中が熱くなるのを感じる。

「顔が赤いから、お熱があるのかと思ったけど、大丈夫みたいね」

「咳き込んだせいでしょ」

みどりが戻ってきてそう言いながら高木の口元に薬をつけた。

「そろそろ、お式が始まるわね。」

ブーケの準備はもう良かったの？」

みどりの間に夕子が答えた。

「ええ、高木さんのおかげで素敵なブーケになりました」

高木は、思わずまじまじと飾ってあるブーケを見た。

そう言えば、さっき選んでもらった花がブーケになっている。

「高木君ったら、気が効かない。」

花束なんか結婚式でもらっても困るだけなのに。

新婚旅行に持ってくわけには行かないでしょ」

佐藤の言葉にみどりが笑った。

「めでたい事には花、って言う男らしい単純発想よ」

夕子が言った。

「でも、うれしいです。それに、星美がフラワーコーディネイト習

っていたおかげで、

ブーケにしてもらえたし。

心に残るブーケになりそうです。」

夕子はブーケに顔を寄せ、幸せそうに微笑んだ。

高木は、うれしかった。

”これで借池さえ確保できていれば”

10. 襲撃

高木は笑顔を作って、みどり達にお辞儀をして、廊下に出た。控え室の入り口では小林刑事が油断無くあたりを見回している。その視界から、隠れるため廊下に飾ってある、壺の横に高木は立った。

今までの事件を反芻してみる。

借池は今まで、欲しいと思ったものはすべて手に入れてきた男だ。しかし、夕子だけはどうしても手に入れる事が出来ない。

彼女は物じゃない、人だ。

そんな事は、借池にはお構いなしだ。

邪魔者の陽一を排除しさえすれば、夕子は自分のものになる、と単純に考え

陽一を攻撃してきた。

しかしそれは失敗した。

そして、とうとう今日、夕子は完全に陽一のものになる。

彼にはそれは絶対許せない。

だから、今日は必ず陽一を狙ってくる・・・はず。

高木の思考は、話し掛けられ、途切れる。

黒服の男性従業員だ。

「坊や、どのお部屋か、分からなくなったのかい？」

高木は笑顔で首を横に振る。

従業員は去っていった。

と前方から話し声が聞こえてくる。

「いくらお兄ちゃんに取られたくないからって、壊す事は無いでしょう」

「だって、絶対渡したくなかったんだもん」

「さあ、もう泣かないで。式場に行っておきましょう」
さっきの弟と母親だ。

高木に気付かずその前を通り過ぎる。

高木は、嫌な考えに突き当たる。

”絶対に渡したくないから、壊してしまおう・・・”

それは、本当に子供の考え方だ。

だが、借池朝彦は大人といえるだろうか？

生まれてこの方、欲しいものはなんでも手に入れてきた男。

他人が、自分の欲しかった物を手に入れるの見るのは絶えがたい事
だろう。

だから、だから・・・。

青野陽一を狙う事が無理だとわかった、借池は、夕子の方を狙って
くる恐れが高い。

それも、今だ。

今なら、女性の控え室という事もあり、男性がなかなか入れない。

しかし、従業員なら？

廊下を行き交う、個性のない黒服の従業員がみな怪しげに見えてく
る。

そう、結婚式がはじまれば、警備は厳重になる。

”メールで、このことを佐藤さんに伝えて、小林刑事だけでなくほ
かの連中にも、

入り口を固めてもらわなくては”

上着のポケットを探った高木は、

思わずうめき声をあげ様として咳き込む羽目になった。

携帯電話を持ってきていない！

いつもなら、背広のポケットに無意識のうちにに入れて外出するのだが
今日は、いつもと違う！

高木は一瞬迷ったが、小林刑事の方に歩き出した。

自分が、どう思われようとそんな事は関係ない。

とにかく、古谷夕子を守る事が先決だ。

「坊や？ 一体何の用だい？」

手まねで、物を書く真似をすると、小林は笑顔で言った。

「ああ、書くものが欲しいんだね」

小林が、背広のあちこちを探す間、高木はいらいらしながら待った。夕子の控え室に顔が隠れるような大きな花束を持った、薄い柿色の和服を来た女性がやってきた。

小林は、メモ帳を探すのをやめて、職員の女性を見る。

女性は薄く笑顔を見せて会釈をする。

「また、花束のプレゼントですか。どうぞ」

ノックをして女性は部屋に入る。

高木は下から女性職員を見上げながら思った。

” 気の効かないプレゼントをするのは、俺だけじゃなかったんだ・・・。

ま、俺のより大きいけど、花束”

ふと、何かが気にかかる。

部屋に入っていく女性の後姿を見ながら、何が気にかかったかを考える。

下から見上げる花束。

花束を抱く手。

手・・・。

花束を手渡す時、店員の細い指と、男の、関節の太い指が触れ合う。

手・・・。

今花束を抱いていたのは、男の手だ！

「坊や、はいメモ帳だよ」

小林が高木にメモ帳を差し出す。

女性は、花束を持って夕子のすぐ側まで近づいている。

くそ！間に合わない！

高木はとっさに小林刑事からのメモ帳を取り上げると、

手首のスナップを思い切り効かせて、侵入者のうなじめがけて投げつけた。

メモ帳は、急速に回転し、狙いたがわず目標にメモ帳の角が当たった。

「うわ！」

和服姿からあがった悲鳴は男の声だった。

「借池さん?!」

夕子が恐怖の叫びをあげる。

花束を取り落とした手には、ナイフが鈍く光っている。

高木は走る。

男は、夕子に切り付けようとする。

しかし、佐藤が、それを体で阻止する。

ナイフは佐藤の腕を掠め、着物の袖が血に染まる。

「佐藤さん！」

叫ぼうとして、高木は咳き込む。

誰かの悲鳴が響き渡り、

「警察を呼べ！」と叫び声が廊下でする。

小林刑事が男を羽交い絞めにする。

と、急に男の様子が変わった。

「く、苦しい」

どう見てもそれは演技ではなさそうだった。

小林は、男を床に横たえる。

「くっそお・・・あいつ、何が落ち着くクスリ・・・騙しやが・・・」

男の瞳から、光が急速に消えていく。

「どうしました！」

白鳥が刑事達を引き連れて駆け込んでくる。

その中になぜか新出医師がいるのを高木は不思議に思った。

「佐藤さん！怪我を！」

白鳥に佐藤は気丈に叫ぶ。

「かすり傷よ！お医者さんがいるなら、あちらが先よ！」

何か毒でも飲んだみたい」

新出は、男を診てすぐに首を横に振った。

「ダメです。」

それに、このアーモンド臭。青酸カリのようですね」

「そうですか」

そう言って、白鳥は、男の顔を仔細に見て、顔と首の境に手をかけた。

仮面がはがれて、その下から借池 朝彦の顔が現れた。

「変装してきたのか・・・」

白鳥は立ち上がると佐藤の方へ向かった。

その時高木は、新出が死体に向かって、うつすらと笑みを浮かべるのを見た。

唇がかすかに動く。

何かをつぶやいたのだが、それは聞こえない。

ただ、その表情は決して医師が死者を悼むものではなかった。

むしろ、あざ笑うかのようなその笑み。

その意味を考える間も無く、切迫した佐藤の声が高木の注意を奪った。

「白鳥君、体が・・・動かな・・・い」

「佐藤さん！どうされました」

高木は佐藤の側に駆け寄ろうとしたが、他の刑事たちに押しのけられた。

刑事たちの隙間から、白鳥に抱きかかえられるように、蒼ざめて横

たわる佐藤が見える。

白鳥は、すばやく佐藤の着物の片袖をたくし上げ、
二の腕に口を当て、そして離し血を吐き出した。

1回、2回。

「何あなたは馬鹿なことやってるんですか！」

新出の怒鳴り声が響いた。

「ナイフに毒が塗ってあったのかもしれないんです」

白鳥が言い返す。

「そうならまだ、傷に毒物が付着してるかも知れないですよ！
そんなことしたら、あなたまで毒でやられてしまうでしょう！
それより何か縛るものを！」

みどりは自分の帯締めをすばやくほどくと新出に手渡した。

高木は何とか佐藤に近づこうとするが、刑事達の厚い壁をすり抜ける事が出来ない。

「小林さん、パトカーを裏口へ回して。」

救急車より早くいけるでしょう。

高野さんは、ナイフを鑑識に回して、一刻も早く毒物の特定を」

白鳥は、佐藤の応急処置の間に次々と刑事たちに指示を出していく。

「応急処置は終了です。」

白鳥刑事さん、あなたも病院に来て、検査ですよ」

新出の言葉に、白鳥は頷き、佐藤を抱えて立ち上がった。

「佐藤刑事さん！」

駆け寄ろうとした、高木は、今度は、走り寄った夕子に突き飛ばされてしりもちをついた。

佐藤と同じくらい蒼ざめた夕子はブーケを佐藤の胸の上に置いた。

「佐藤刑事さん」

佐藤はかすかに目を開けて、涙ぐむ夕子に微笑んだ。

「このブーケはあなたのです。」

次の花嫁は、あなたですよ。

だから、だから、死なないで佐藤刑事さん！」

夕子は泣き崩れた。

「パトカー回しました!」

「行きます」

白鳥は、佐藤を軽々と抱えたまま、部屋を飛び出した。

高木はその後を追おうとするが、今度は別の刑事に突き当たる。

「坊主! 邪魔だ!」

佐藤の名を叫ぼうとして再び咳き込む。

嵐のように、刑事達の一群が去ったあと、すすり泣きの声が残された。

高木は振り向いた。

泣いている夕子に、目暮夫妻が声をかけている。

「大丈夫よ、夕子さん。」

さあ、そろそろ式が始まるわ」

「私、皆さんにこんなご迷惑かけてまで・・・」

陽一が、夕子に優しく言った。

「夕子、俺が嫌になったんなら、結婚はしなくていい。

でも、俺を好いてくれるなら、今日今から結婚式を挙げようじゃないか。

そうでないと、せっかくの刑事さん達の力添えは無駄になってしま
う」

目暮が、夕子を力づけるように、その肩に大きな手を置いた。

「佐藤君は、運が強い人間でな。

前、撃たれた時も、危ないといわれながらもしっかり回復しとったし、

今回も運良く新出先生が、受け持ちの患者さんに
式場に呼ばれとったから、処置も早くできた。

絶対に、大丈夫だ」

夕子は立ち上がり、陽一の側に寄り添った。

二人は目暮夫妻とともに式場に歩みだした。

高木は、大人たちが自分の頭上を通り過ぎるのを呆然と見ていた。誰も、自分に気が付かない。

何も、出来ない。

何一つ。

佐藤さんを助ける事も、病院へ運ぶ事も・・・。

それに比べて、白鳥警部のなんと、頼りがいのある姿だった事か。

高木は、無我夢中で式場を飛び出していた。

11. 暗転

どうやって、寮に帰ったのか、自分でもわからなかった。

高木は、服を脱ぎ捨てると、ゴミ箱の奥深くに押し込んだ。

この体が憎かった。

この体に合う服さえも。

高木は、タンスにかけてある、自分のいつもの背広を取り出す。

大きさに構わずそれを身につける。

手さえ出てこない袖を見つめて、壁に寄りかかり座り込んだ。

体を丸めて、呪文のように心の中で繰り返す。

” 戻れ、戻れ、俺の体。

頼む、戻ってくれ！！

こんな体じゃあ、佐藤さんを守れない！”

どのくらい時間がたったのか、高木は妙な暑苦しさを覚えた。

無意識にネクタイを必要もなく緩める。

その暑苦しさは、どんどん、ひどくなってくる。

” この感じ、これはまさか・・・”

自分が小さくなった時のあの体の熱さだ。

大きく心臓が動く。

その苦しさに、高木は自分の胸を思わず驚掴みにする。

熱い・・・。骨が溶けてくみたいだ・・・。

その中で、高木は背筋の凍る推論にいたる。

” またこんな状態になったって事は

まさか、俺の体、まだ小さくなるんじゃあ・・・

これ以上小さくなるって事は・・・死・・・。”

この熱が無くなれば、体が小さくなるのを避けられるかもしれない。

高木は体を引きずって、浴室へ向かった。

もう立ち上がる事も出来ない。

バスタブに体を持たれかけ、シャワーを全開にする。

背広ごと、高木は水を浴びた。

水のしぶきのせいかな、視界がぼやけてくる。

”頼む。俺の体。

もうこれ以上・・・小さくならないで・・・く・・・”

高木の意識は水音にかき消されるように薄れて行った。

12. 目覚め

規則正しい、電子音が聞こえる。

目覚まし？

にしては、ずいぶんゆっくりのような・・・。

高木は目を開いた。

見覚えの無い灰色の天井。

ゆっくりと顔を横に向ける途中で、白鳥の顔が視界に入る。

白鳥は何も言わず高木を見つめる。

高木も、ここに白鳥がいる意味をつかめず、ぼんやりとその顔を見つめ返す。

しばらくして、記憶の中から、疑問が浮かびあがる。

「白鳥さん、佐藤さん・・・は？」

白鳥の顔がゆがむ。

刹那、高木は白鳥が泣き出すのかと、思ったがそうではなかった。

「高木君、君はね、佐藤さんは？じゃあ無いでしょう」

大きな声に、白衣の男が飛んでくる。

白鳥の背後で何か言っているが白鳥の怒声にその声はかき消される。

「君はね、心臓が一度止まったんですよ。」

分かっているんですか！」

息を整えるため白鳥が、一瞬黙る。

その隙に、白衣の男が白鳥と高木の間に割って入った。

「白鳥、もういいから。」

彼まだはっきり目が覚めたわけじゃないんだ。

でも、もう大丈夫。あの警部さんも心配してたんだから早く教えてあげなよ」

白鳥はその言葉に、落ち着き払ったいつもの表情になった。

「分かりました、それでは、よろしく願います」

高木は、白鳥の後姿を、はっきりしない頭で見送った。

白衣の男が、笑顔で高木に話し掛ける。

「高木さん、ここがどこだか分かりますか？」

「病・・・院ですね」

話すとのどが痛む。

「そうです。どうして、ここににいるか、覚えていますか？」

どうして？ どうして・・・。

一気に記憶が戻り、高木はベッドから起き上がろうとした。

医師に押さえつけられる。

その手を払いのけようとした自分の手を高木は、動きを止めて見つめる。

この手は、子供の手じゃない。

では、俺は、元の体に戻ったのか？

じゃあ、なんでこんなに体に力が入らないんだ？

「力が入らない・・・のどが・・・痛い」

医師に寝かしつけられながら、高木はつぶやいた。

「しかたないです。」

高木さん。あなたは、一度、心臓も呼吸も止まったんですよ。

のどが痛いのは、のどに呼吸をさせるための管を入れていたからです。

いいですか、あなたは、ひどい風邪を引いているのに、

どうやら仕事が気になって街を歩き回っていたんですよ。

そして、熱で朦朧となって、寮に戻って、

おそらくその熱を冷まそうと、

シャワーを浴びて、そのままそこで意識を失っていたんです。

白鳥が、あなたを心配して寮を訪ねて、

それを発見してなかったら、危なかったんですよ。

それにしても、君に見せたかったですね。

白鳥があんなに動揺したのは、始めて見たな。

そうそう私は、大学時代白鳥と一緒にだね、」

医師はそう言って笑った。

「とにかく今は、もう一眠りした方がいいですよ」

「佐藤さんは？」

「佐藤さん？ ああ、クラールにやられてきた女刑事さん。
彼女も大丈夫ですよ」

「ホントに？」

「本当です」

医師の言葉と表情に高木は、安心した。

再び眠気に襲われて、高木は目を閉じた。

集中治療室から出た白鳥は、蒼ざめた顔色の佐藤に出会った。

「佐藤さん、あなた、まだ安静にしておかないと」

「白鳥君、高木君は？」

白くなるほど握り締められた両の手を胸の前に佐藤は聞いた。

あの時、集中治療室で、まだ治療を受けていた佐藤の横を通って
高木が、その中に運び込まれた。

その時は、彼女は誰が運び込まれたのかまったく気がついていなかった。

しかし、慌しく医師や看護婦が集まっていく、
そのベッドの横の白鳥に気づいた時の彼女の眼。

そして、不規則なリズムの電子音が急に1本調子になって
神経を脅かすように、鳴り響く中、医療スタッフの動きが
緊迫感を急に、増した時、

佐藤は、人工呼吸器をつけたまま、起き上がろうとしたのだ。
クスリのせいで、まだ体が動かないはずなのに・・・。

その時のことを思い出して、白鳥は、思わず頬に手をあてた。

かすかな、爪あとがまだ指に触れる。

佐藤の爪あとだ。

「もう安心だそうです。

さつき目を覚ましましたよ」

安堵の色が佐藤の顔に広がる。

「高木君が、あなたの事を心配しました。

まったく人の心配するより、自分の心配をすべきでしょうに」

「そうね、ホントに、高木君ったら・・・」

佐藤は笑顔を作ろうとしたが、表情はゆがみ泣き顔になった。

そして、いきなり、顔を白鳥の胸にうずめて泣き出した。

白鳥は、片手を佐藤の髪に置いて、天井を見上げた。

「良かった・・・。高木君・・・」

やがて、佐藤の嗚咽は収まり、白鳥の胸から顔をあげた。

「ご、ごめんなさい、取り乱して。

白鳥君、ありがとう。高木君を助けてくれて。

もし白鳥君が心配して、高木君を訪ねてくれなかったら、

きつと、高木君・・・」

自分の想像に、佐藤は、我知らず、両腕で、体を抱きしめる。

その想いを消すように白鳥は言った。

「これしきの事、先輩として当然の事ですよ。

もっとも、高木君が恩を感じてくれたら、しっかり売りますが」

佐藤が笑った。

そして、白鳥の頬に手をあてた。

「ごめんなさい、白鳥君。

私、無我夢中で引っかっちゃったのよね。

あの時、高木君が、お父さんみたいに死んじゃうと思って、

頭に血が上ってたのよ。

それに、私を助けてくれたのに。

米花会館で、自分も危なかったかもしれないのに

毒を吸い出してくれて。

ごめんなさい、お礼が遅くなってしまつて」

「いえ、誰だつてする、当然のことですよ」

白鳥は、平然と言つた。

「そうだ、白鳥君、私が入院している事、高木君に話したの？

私の事を心配してるなんて」

佐藤はいつもの調子で言つた。

白鳥は内心、ため息をつきながら答えた。

「まさか。でも、あなたがいつも無鉄砲な事をするから、

きつと、不安な夢でも見たんでしよう。

さあ、まだ、本当は、部屋から出る許可も出てないんでしょう？

彼の心配も、もっともだ。部屋まで、送ります」

白鳥は廊下に置いてあつた車椅子を佐藤の前に持つてきた。

「あら、大丈夫よ」

その時、廊下の向こうの方から、佐藤の母親の声が聞こえてきた。

「みゝわゝこゝ」

慌てた様子の看護婦も一緒だ。

「まったくあんたは何やってるの！

まだ、安静にしておけて、回診で言われたばかりじゃない！」

母親の叱責を佐藤は軽く受け流した。

看護婦が佐藤を無理やり車椅子に座らせる。

佐藤の母親が白鳥に頭を下げる。

佐藤はいたずらっぽく、白鳥に笑いかける。

「白鳥君、じゃあまたね！」

さつきとはうって変わった明るい表情で佐藤は、去っていった。

白鳥は、その後姿が、廊下の角を曲がって見えなくなるまで見送つた。

そして、廊下の壁にもたれかかつて、自らをあざ笑うように口元をゆがめた。

「佐藤さん・・・、あなたは残酷な人だ」

13. 確かな物

元太が、高木のベットの横で声をあげた。

「にしても、佐藤刑事は、人をかばって怪我して入院。

高木刑事は、風邪こじらせて入院だもんな。

ホント、ドジだよな」

佐藤は、元太のもっともな言葉に、しおれてしまう高木の背中を叩いた。

「しゃんとして、高木君。

元太君、高木君は仕事のしすぎで風邪引いたのよ、ドジは取り消して」

ウインクする佐藤に、歩美は言った。

「佐藤刑事は高木刑事のことを何でも知っているんだ」

「そりゃ、そうですよね。

同じ日に、同じ病院に入院して、同じ日に退院するんですから。まさに、これは運命としかいいようがないですよ」

「あれ、高木刑事、佐藤刑事、顔赤いぜ？

明日退院なのに、また風邪引いちゃったのかよ？」

元太の言葉に佐藤はいっそう顔を赤くして言った。

「わ、私の病室にケーキがあったのよ。持ってくるわ」

そそくさと、佐藤は部屋を出て行った。

子供達は、ケーキだ、ケーキだとひとしきり騒いだ。

その様子を見てみると、あの夢のような一日の事を思い出す。

自分が子供になってしまったあの日。

彼らと、大体同じ年になっていたのだ。

今では、それが本当の事とは思えない。

入院している佐藤が初めて見舞いに来てくれた時、自分の体が小さくなってしまった事を話してみた。

駐車場で、気分が悪くなって倒れた事。

佐藤の電話で、目が覚めた自分が小さくなったことに気づいた事。

そこまで話した時、佐藤は、心配そうに言った。

「高木君？私のこと、本当にわかってる？」

真正面から、見つめるその表情は、不安で揺れていた。

”一度死にかけた際の後遺症で、幻覚を本当の事と、思い込んでいる”

と、佐藤が、信じている事は、その後の、高木への、麻薬の類で酔っている被疑者に対するような、態度で明白だった。

高木は、この話はもう、誰にもしない方がよい、と判断せざるを得なかった。

あの時着ていた服があれば、現実味があるのだが、それは無い。

入院中、寮の部屋の掃除をしてくれた、管理人さんに

子供の服が無かったどうかきいてみた。

不思議そうな顔をしながらも、そんなものにはなかったと答えがあった。

あの時、腹立ち紛れにゴミ箱の奥に放り込んだのだから、

ゴミといっしょに捨てられても不思議は無い。

それとも、そんな物は最初から、なかったのかもしれない。

元太が言った。

「でも、信じられねえよな。

風邪引いたくらいで、心臓が止まるなんてよ」

「僕だって、信じられないよ。

でも、風邪のウイルスが、心臓に悪さすると、そういう事もあるんだって。

君達も気をつけなよ」

「風邪は万病の元、といえますからね」

「哀ちゃんと、コナン君、大丈夫かな」

歩美が心配そうに言った。

「そう言えば、今日はコナン君、来てないんだ」

灰原は、少年探偵団の中に、いる時といない時があるが、

コナンがいないのは、なんとも不思議だった。

「哀ちゃんが風邪引いて、コナン君に、移っちゃったんだって」

「お見舞いに行きたいんですけど、僕達にも移るとまずいからって」
不服そうに光彦が言った。

「そう言えば、この間、デザイン事務所で会った時も、哀ちゃんはマスクしてたな。」

彼女の風邪、長引いてるみたいだね。」

「デザイン事務所って何か事件があったのかよ」

「コナン君得意の、ぬけがけですね」

二人の小さな探偵に詰め寄られて

高木はベットの上で後ずさりしたい気分になった。

「風邪の灰原さんを、外出させるなんて、まったくコナン君と来た
ら」

「まうた、『僕、こんな大好きなんだも〜ん』とか何とか言って
事件に口出ししたんだろ」

元太の言葉に高木は思わず笑った。

「なんだい、『僕、こんな大好きなんだも〜ん』って」

「コナンの奴、大人の前じゃあ、不気味に子供っぽくしゃべるんだ
ぜ。」

『でしょ?』とか『だよね?』てさ」

「元太君、可愛いから良いじゃない」

歩美が抗議の声をあげた。

”そう言えばそうかな?”

高木はコナンの言動を思い出してみた。

そして、自分が子供の体になっていた時の事にふと考えがそれる。
あの時、自分は必要以上に、

大人の前では子供っぽく振舞っていた気がする。

”まさか、コナン君も、本当は大人で、体が小さくなった・・・”
突拍子も無い考えが、頭に浮かぶ。

と、ノックの音で、高木の意識はそれる。

佐藤がケーキの箱を持って戻って来た。

少年探偵団は歓声をあげてケーキを食べだした。

「元太君、口の周り、クリームいっぱいだよ」

歩美に言われ、手で、それを、ぬぐおうとする元太に

佐藤は、パジャマの胸ポケットからハンカチを差し出した。

その拍子に、一葉のカードが落ちる。

歩美がすばやくそれを拾って言った。

「あ、押し花だ。可愛い」

「綺麗な色ですね」

光彦が覗き込んで言う。

「これは、もらったブーケを押し花にしたの」

「ブーケって、結婚式の？」

期待するように歩美が問う。

「そうよ、全部取って置きたかったけど、それは出来ないから、
一番気に入った花をお母さんに頼んで押し花にしてもらったの。

お母さんもお守りにしなさいって言うから、ずっと持っているのよ」

「ほら、高木刑事も見て。綺麗でしょ」

高木は、その押し花のカードを見て一瞬、言葉を失った。

カードの上に花開くのは、鮮やかなピンクのスイトピー。

「花言葉は、『門出』、だそうです。」

姉さんがそう言っていました」

「『門出』。ロマンチックね」

歩美が、夢見るように言った。

「あら、由美から聞いたら、ピンクのスイトピーの花言葉は
”恋の愉しみ”だって聞いたけど」

「どちらにしても、結婚式にはふさわしい花ですね」

光彦が、納得するようにうなずいた。

「高木刑事、何にやにや笑ってるんだよ」

元太の言葉に高木は、慌てて、真面目そうな顔を作った。

「高木君、私が、乙女チックに押し花なんて持ってるから面白いの
ね」

「い、いえ、そうじゃ、ありませんよ」

そうじゃない。

あの花は、自分が佐藤を思い描いて選んだのだ。

もちろん、あの時の記憶は幻で、その花は、花屋が、

結婚式にふさわしい花として、選んだ物かもしれない。

しかし、記憶が幻であったとしても、気持ちには幻ではない。

もしそうなら、いまこんなに胸が、温かなはずがない。

急に、うつむいた高木に心配そうに佐藤が言った。

「どうしたの？高木君」

「いえ、生きてて良かったな、って、しみじみ思っ

佐藤は、少し、驚いたように目を見張ったが、すぐに

花の咲くような笑顔になった。

「私もそう思うわ、高木君」

14. Appendix

高木の奴、明日めでたく退院だってな」

「まったく、運が強いというか。」

もつとも、死なれて、佐藤さんの中に、居座られる方が厄介ですけどね」

薄暗いバーの片隅で白鳥は、グラスを傾けた。

高野はニヤニヤと笑いながら、表情を殺した白鳥の横顔を見た。

「ま、そういう事にしておこうか。」

もつとも、お前も運が強いぜ、白鳥。

アレが、口から入っても効く毒物なら、あんな事したお前も危なかったんだぜ」

「運が強いやら、弱いやら。まったく」

白鳥は自嘲的に言い、グラスをあおった。

「思い出になんかで居座るより、現実に居座って、高木に嫌味を言っただけよ」

高野は、白鳥の背中を大きな音を立てて平手ではたいた。

白鳥は、グラスの酒にむせ咳き込み、それを見て、高野は笑った。

ひとしきり笑った後、高野は、一口自分の前の酒を飲んで改まった口調になった。

「白鳥、大塚の話を聞いたか？」

「監察局？なんの？」

「借池の親父の死因」

「心不全だったんでしょう？もつとも心不全の原因は不明だそうですが」

「病歴から見れば、奴の心臓が止まるのは、心筋梗塞が原因のはずだった。」

かなり悪かったらしいからな。

だが、な、心臓は綺麗だった」

白鳥はいぶかしく思いながら、高野の次の言葉を待った。

「おまけに、動脈硬化を起こしていた他の血管も綺麗になっていた。まるで、子供の血管だったそうさ。」

その上、体の中身すべてが、新品同様だったとさ」

「それはどういう・・・。いや、なら、なぜ彼は死んだんです？」

「さあな。」

ただ、監察の連中は高木の奴が、あの親父に

マウス・トゥー・マウスの人工呼吸をしたあと

ぶっ倒れたのを知っててな、高木が若いのを残念がっていた。

ありゃあ、あいつら、奴がもっと、年を取っていたら、生きたまま解剖して

調べてたぜ、きっと」

白鳥はグラスをもてあそんだ。

「結局、借池 朝彦はじぶんで変装し、クラーレを入手した、ことになりましたが、

共犯者がいたと考える方が自然でしょう。

しかし、その証拠はまったくない。

そして、父親は不自然極まりない自然死、ですか・・・」

「おまけに、あの借池のボンボンは相手を殺して心中を図るタマじやあねえ。

一応、そういう結論になっていてもな。なんかひっかるな」

「当然です。」

しかし、これもまた、証拠がない。

ですから今は目の前にある仕事を片付けていくしかないでしょう」

「ま、そういうことだ。」

じゃ、とりあえずは、あさつての高木、佐藤の合同退院祝いの計画でも立てるかな」

不気味な笑みを浮かべながら言う高野に、白鳥は心配そうに言った。

「高野さん、仕事が溜まっているんですから、

次の日に欠席者が出ない程度の盛り上がりにしましょうよ」

高野は、口を顔中に広げて笑った。

「まあ、任せとけて、

ほれこの計画なら、美和ちゃんと高木は・・・」

「なるほどね」

よからぬ計画が着々と進行している事は、明日に備えて眠っている高木と佐藤は知る由も無かった。

（おわり）

14. Appendix (後書き)

長々読んでくださった方、ありがとうございます。
楽しんでいただけたら幸いです。

では、このお話を書きながら思った事などを。
まずは高野さんについて。

私は、コナンの2次小説を書く時はレギュラーとなる人物に
私自身の作ったオリジナルの人物は
入れないようにしています。

そう書くと、「じゃ、高野さんって誰？」

といわれる方がきつというらしいような気がしますので
高野さんについて少し、説明を。

高野さん、とは原作の40巻の「甘いデートにご用心」

(アニメでは「本庁の刑事恋物語5」)で、

マリリンの着ぐるみに入って、デートを監視していた、あの刑事さ
んです。

原作でも、アニメでもそれっきり登場のチャンスは無いのですが(2004.06.23現在)

2次小説に登場願っております。

白鳥警部のことを、呼び捨てにして、ため口を叩ける刑事さんはほとん
ど、

コナンには登場していません。

でも、2次小説を書いていると、どうしても、主たる人物を側から
同じ高さの別視点で、

見る事のできる人物が、少なくとも私は、欲しくなるのです。

新一には、服部君。

蘭ちゃんには、園子ちゃん。

佐藤さんには、由美さん。

そして、高木君には千葉君（原作です。アニメでは後輩ですね）がいますよね。

で、白鳥警部には、高野さんにその役を、私の2次小説では、引き受けていただいています。

同じ警部の「藤巻 学」刑事のほうが、その役柄にふさわしいような気がするのですが

原作の時点では、インパクトの強い出方の割には、お名前が無かったので

高野さんが良い役を取ってしまいました（^^）

ちなみに、「藤巻 学」刑事というのは、

40巻「甘いデートにご注意を」の最初のページで高木刑事を尋問していたり、

同巻の「不純な大搜索」の中で「結婚披露宴」という

ナイスな空耳を聞いてくださった方です。

後はたわ言を。

高木君の住まいについて

何でも、独身の警察官は寮に住まわなければ

いけないそうなんです。

（BBSで聞いたことですので、警察関係の人に聞いたわけではありません）

でも、警察の寮ってどんな所か分かるわけないし（^^）

まあ、いくらなんでもシャワーくらいはついているだろうと思って、シャワーつきにしています。

ちなみに私が、遠い昔入っていた寮には、シャワーもなかったので、毎日、銭湯通いしました。

ミヨゝな迷い

この手の変身物（^^）で困るのは洋服。

古くは手塚治虫先生のバンパイヤ、割と新しい？所で言えば、篠原千絵先生の「闇のパープルアイ」

皆変身すると、裸になってますよね。確か。

幸い、元に戻ると服は何となく調達できているようですが（^^）このお話を考える時、変身後（^^）の高木君の

洋服には、困りました。

苦肉の策は、読んでの如しですが、元に戻る時も実は困ったのです。

シャワー室で、気を失った所を発見される、というのは、最初から不動でした。

しかし、最初の案では、

発見者は、佐藤さん（*^^*）と白鳥警部でした。

で、子供から大人に戻っているんだから、当然・・・ですよ。

しかし、ストーリーをいじっているうちに、佐藤さんは、入院（^^）。

発見者は白鳥警部だけ。

で、裸の高木君を発見するのか。

・・・なんか、絵的に嫌かも（^^）。

で、色々考えてあんなったわけです。

あれなら、不自然さが無く、大人の洋服を着せる事ができると思っただけですが、読んだ皆さんが、どう感じられたか、気になる所です。

私は、これなら、OKと思って書きながらも、

” 四角いスイカをつくるんじゃないんだからなあ ”

などと心の中で突っ込みを入れておりました（^^；）

チビわた君の声

2次小説を書くにあたって私が気をつけていること。

それは、セリフが、声優さんの声で聞こえてくるか、という事です。もし、聞こえてこなければ、それは、自分が

その人物設定を把握していない事になると私は、思っています。

しかし、今回のチビわた君。

困りましたわ（^^）。

声優の高木渉さんは、子どもの声も、もちろん受け持ってもらっています。

あのチビわた君の声は、絶対元太君の声じゃあなくいい（^^）。

かといって、具体的な声はさっぱり思いつかない。

声が無ければ、セリフも思いつかない。

という事で、とりあえず、声が出せなくなってしまいました（^^；

）

かなりご都合主義なんです

が、これだけ、体に変化したら、どこかに負担がかかるはずだし、

ましてや、成長期の新一より、体全体の伸縮性（^^）が劣っているはず。

そして、男の子は、声変わりで、声が出にくくなることもあるので、急に小さくなくても、やっぱりのどに負担がかかるかな〜、な〜んちゃってな、一応裏設定でした（^^；）。

それでは、たわ言まで読んで下さってありがとうございますm（

）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2288a/>

幻の一日

2010年10月9日23時12分発行